
夢見鳥の唄

楠瑞稀

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見鳥の唄

【Nコード】

N0228B

【作者名】

楠瑞稀

【あらすじ】

「歌が聞こえる？」授業中、自分にしか聞こえない歌が流れている。その事に気がついたシンヤは悪友のミサトと共に歌の秘密を探ろうとするのだが…？ミステリー風味のハイテンションコミカル学園ファンタジー！完結済み作品。全六話。

1、凶器とは『絶対凶悪人類撲滅文房器具』の略（前書き）

この作品は、作者のHP『飛空図書館』で連載していた作品と同一のものです。またそちらではすでに完結しております。

1、凶器とは『絶対凶悪人類撲滅文房器具』の略

忘れないで

今は遠く離れていても

見知らぬ空の下にいても

あの時たしかに私たちは

このなつかしさの中にいた

(…歌が聞こえる?)

はっ、と目を開けた時には授業の終わりを告げるチャイムが高らかに鳴り響いていた。

「あちゃあ、しまったなあ」

がやがやと席を立ち始める生徒たちの中で、俺はひとりふっとアンニュイなため息をつく。

空が青くても、檸檬が黄色くても思い悩んでしまう青春まっしぐらな年頃だ。

何に心痛めても、当然といっちゃあ当然かもしれないが、この絶望感の間違えて核爆弾のスイッチを押してしまったと仮定した場合と同じぐらいに自分を責めたてる。

つまり何が言いたいのかというと、今日もノートは真っ白だった。定期テストも近いというのに、これは真剣にやばい。俗に言うところのマジでヤバイ。

さて、この未曾有の危機を回避するためにはいったい誰にノートを借りるべきかだろうか。

俺の脳みそがスーパーコンピューターも真っ青な速度で計算を始める。

サッカー部の田中か。いや、それともバスケット部の新堂か。

悪友の顔がいくつも思い浮かぶ。

「でもあいつらみんな字い汚いしなあ」

もちろん自分のことは棚に上げている。教科書を机にしまいながらそう呟いていると、突然、背後から衝撃が走った。

ばきいっつー！！

目から星が飛び出した。眼前におがくずでもあれば実に良い感じの火種になっただろう。

つまりはあまりの痛さに叫ぶことも出来ない。

これは今の棚上げに対する天罰か？

だとしたら神様もかなりの即決判断明朗会計で結構なことだ。

「……て、てめえっ！　いったい誰だ、何しやがる……！」

だが相手が神であれ犬であれ関係ない。

かなり本気で怒鳴り振り返ると、そこにはノートをかまえた女神、ではなく女子生徒がひとり。

いまだ向けられたままのその角でどうやらおれは殴られたらしい。

明るい色をしたほわほわの髪が二つに結わかれ肩の上で揺れている。

本人の言によると天然らしいがそれもあやしいものだ。

「ミサトっ、お前か！　　いったいどういつつもりだよ」

うつかり涙がにじんでしまった目で睨み付けると、女子生徒は弁解の言葉を述べるどころかふふんと鼻で笑いやがった。

咽喉を反らし、腕を組み、完璧見下しモード全開。

むしろ見上げながら見下すとは敵ながらなかなか器用なものだ。

愛くるしいとも言えなくもない童顔が、今は憎たらしくも勝ち誇った色に染め上げられている。

「シンヤ、あんたまた寝てたんでしょ。そんなに寝てると脳みそが溶けるわよ」

「な、何を根拠にそんなこと言うんだよ！」

反論したのは脳みそ溶解説ではなく快眠疑惑について。

まあ、疑惑も何もまさにその通りなのだが、当然の事のようにそう決め付けられては腹が立つ。

大体こいつの席はおれよりも前にある。授業中振り向かない限り知っているはずがないのだ。

さてはこやつ、エスパーなのか。今まさに天然記念物となろうとしている超能力少女ではあるまいな。

ミサトはにやりと笑って、つんつんと自分の頬を指し示した。
物好きな男子生徒からは薔薇色と賞賛されている頬。別におれはなんとも思わんが。

「ほった。ノート of 文字が転写されてるわよ」

おれは慌てて軽い痺れの残る頬に手をやるが、よく考えてみればそんなはずがない。ノートは真っ白で転写される文字など初めから書かれてはいないのだ。

まんまとしてやられた。

おれはきりきりと歯軋りをしつつ、クラスメイト兼悪友の女子生徒を睨み付けた。

「おのれ…、よくも騙しよったな」

コノウラミハラサデオクベキカ…！

しかしミサトはすました顔で、一時は凶器（絶対凶悪人類撲滅文房器具の略）と化していたノートをおれの方へ突き出した。さらに見せつけるようにしてパタパタとあおいでいる。

「あら、せっかく人が親切にノートを見せてあげようと思ったのにいいんだ。あつそ」

「すまん、おれが悪かったっ」

あつさりとひるがえされた手首をおれは慌てて掴んだ。
情けないと笑いたい奴は笑えばいい。人はノートの前ではかくも

無力なものなのだ。

「しかし、シンヤ。あんた最近授業中はいつつも寝てるわねえ」

がりがりと必死でノートを書き写すおれの横で、ミサトが呆れたようにため息をついた。

次の授業まであと六分。

少々無謀ではあるが、おれは持てる潜在能力の全てを発揮してでも、この休み時間の間にノートを全て書き写すつもりでいた。

おれは給食の嫌いなおかずはまず一番に手をつける性質だし、何よりも次の休み時間までにミサトの気が変わらないとも言いきれない。

こんなに憎たらしい奴だが、ミサトはこれでも成績はクラスでもトップだったりする。イコール、ノートが見やすいつて事は人類の共通認識だろう。

だがノートが見やすいから成績が良いのか成績が良いからノートが見やすいのか、どちらが正しいのかは永遠の謎だ。

似たような命題で卵が先にわとりが先かというものもある。

「夜更かししてテレビでも見てるの？」

「別にそんなわけでもないけどよ」

書き損じた文字を消しゴムで消すついで、にだるくなった手をぶんぶん振る。

さすがに一時間分の内容を十分で書くのは骨の折れる作業だ。

休み時間のたびにこんなことをしていたら、文字通り手が疲労骨折を起こしそうである。いや、その前に腱鞘炎をおこすほうが先か？

「授業中に歌が流れてくんじゃん。あれを聞いてるといつも、ふうつと意識が遠くなつてさ」

しかし自分のほかには誰も眠くならないのだろうか。もしおれだけが特別眠くなるのなら、これは一種の睡眠障害というやつかもしれない。

首をかしげているとミサトが変な顔でこちらを見ていたので真似して顔を歪めてみたが、身を張ったボケはあっさりスルーされる。これはこれで悲しいものである。

「はあ？」

「はあ、とはなんだよはあとは。流れてんだろ、女の声で。授業中とか休み時間とかによお」

「シンヤ、あんた耳大丈夫？」

耳といいながらも指しているのは微妙に頭部だ。なんとなく馬鹿にされている気がして、おれもまたむつと顔をしかめた。

「気付いてないのか？ おまえこそ耳おかしいんじゃないの。だつてあんなにはつきり流れてんだぜ」

「失礼ね！ じゃあ聞くけど授業中にそんなの流していったい何の得があるって言うのよ」

「わかんねえけど…、今流行りの情操教育ってやつじゃねえの？」

おれの言葉にはあゝとミサトは深々とため息をついた。眉をひそめると外国人のように両手をかかげて首を振る。

「あんた馬鹿日本一決定ね。スペシャリスト馬鹿ね。考えても見なさいよ。授業中に見境なく音楽流したらうっとおしくてしょうがないじゃない。集中できないわよ、馬鹿」

「そんなもんか？」

おれは家で宿題をやる時にはお気に入りのハードロックをがんがんにかけて気合を入れているので、いまいちミサトの言うことに納得がいかない。

しっかしスペシャリスト馬鹿とは何だ。アマチュア馬鹿とか、馬鹿国家試験一級とかもあるのか？

「じゃあ、おれの聞いてた曲はいつたい何なんだよ」

「そんなの、あたしが知るわけないでしょうがっ」

噛み付くようにして、おれの疑問は一蹴された。いわゆる逆切れ。分からないならお前だってアマチュア馬鹿だな。あんまり馬鹿にしないで貰いたい。と、言うか馬鹿を競うならもっと馬鹿にしてもらったほうがいいのか？

……いや、やっぱりそれは嫌だ。

「大体あの曲、あの歌って。いったいどんなのよ。ちょっと歌ってみなさいよ」

「そ、それは…」

口ごもるおれをミサトは訳知り顔であざ笑う。不思議の国のアリスに出てきたハートのクイーンだってこんな酷薄そうな顔はできないだろう。

「わかった。口にできないほど恥ずかしい歌なんだ」
「ばっ、ちげえよ。そんなんじゃねえ!!」

おれは顔を真っ赤にして否定する。
大体恥ずかしい歌とはどんな歌だ。逆にこっちが聞きたい。

「じゃあどんな歌よ。気になるじゃない」
「ちよつと待てよ」

カラオケボックスや自分の部屋でならともかく、教室内であらたまつて歌うとなるとかなり抵抗がある。つつか気恥ずかしい。
嘘だと思ふなら、今度学校でやってみればいい。あたりの視線がかなり痛いはずだ。

しかしこのままでは埒があきそうにないので（下手するとノートを取り上げられるかもしれない。それは何より恐ろしい）、おれはぎりぎりの譲歩として小さな声でメロディラインだけを口にした。

何度も何度も聞いた歌なのでほぼ完璧暗記してしまっているのだがミサト王女様はお気に召さなかったらしい。

首をはねよ！

と言う代わりにテイク・ワンと叫んだ。

「そんなごによごによと口の中でだけ歌われたってわかんないわよ。もっとはつきりと、教室中に響き渡るくらい大きな声で歌うのよ！」

「できるかつつ——の！！」

音楽の成績がいつもアヒルさんな人間に無茶を言うな！

：もちろんアヒルは音楽に限ったことではないけれど。一年を通してみると一匹ぐらいは醜いアヒルの仔が混じってそうならいの子沢山。

不満顔のミサトを計らずも教室中に響き渡るくらい大きな声で突っ込んでしまったとたん、のっぺりとした、しかしやけに通りのよい声が背後からかけられた。

「何をだ？」

「きゃっ、篠崎センセエ！！」

変に甲高い声を出してミサトがわたわたと髪の毛をいじる。

「元気がいいのは結構だが、もうチャイムは鳴っているぞ」

「はぁいつ」

素早い動きでミサトが自分の席へと帰っていく。まるでハムスターかハツカネズミかモモンガのようだ。いや、別に頬袋はないのだが。

他の生徒もがたがたと席につき授業の準備を始めた。

結局話はうやむやのまま終わり、俺はほっと息をついた。しかし机の上に目を戻したとたんそれはそのままため息へと変化した。

ノートは半分も写せてなかったのだ。

2、激闘！カラオケ女王への挑戦

学校に教員は数いるが、中でもこの篠崎と言う教師はダントツでよく判らない。

針金みたいに細い身体をして、神経質そうに眼鏡をかけている科学の教師。

奴はかねてよりいろいろおかしな噂に事欠かない。

俺的におすすめなのは眼鏡を外すとビームが出るというある意味お決まりのものだが、他にも都内に千坪の土地を持っているだの、校長の弱みを握っているなどがあつたりする。

あとはT大卒だなんだのと妙に信憑性を持つものもあれば、昔付き合っていた女子生徒を校舎の壁に塗りこめたなどと言う思わずギョツとさせられるものもある。

しかし何ともバラエティーに富んだものである。

まあ、そうでなくとも階段でぼうつと立ち尽くしていたり、放課後の校舎を当直でもないのに歩き回っていたりと奇行がたびたび目撃されているので、口やかましいPTAから文句のひとつも届きそうなものだが意外にも授業はかなり面白かったりするから世の中不思議だ。

おかげで俺も眠りの国へと誘われることなく、なんとか無事に取れたノートを机にしまう。

「だけどやつぱり得体が知れないやつだよなあ」

「得体が知れないじゃなくてミステリアスって言うのっ」

「あいてっ」

振り返るとチョップを構えたミサトが険しい目でオレをにらんでいた。妙にマジな眼差しに俺はちよつとびびる。

「何だよ、別にノートは必要ないぞ」

「そうじゃないわよ、馬鹿っ」

噛み付くように怒鳴りつけ、ひとつ前の椅子に逆向きに座るミサト。

足を開いてまたがっているためスカートが持ち上がり白い太もものがぞくが、別に俺は注意しない。

眼福とまではいかないがなかなかいい眺めを自分で壊すほど、現役高校生は枯れてはいないのだ。

「何見てんのよ、スケベ」

「……」

どうやらばれていたらしい。

だがそこまで露骨に眺めていた訳でもないのだが……。やはりこやつはエスパーか？

「アホなこと考えてるんじゃないわよ。そうじゃなくて、あんたが耳にした幻聴のことよ」

「別に幻聴とは限んねえだろ」

「あんたにしか聞こえないんだから幻聴に決まってるでしょうが」

もしかしてバカ？ とありありと顔に書いてある。とことん人を馬鹿にしないと気がすまないようだ。

おれはふんつとそっぽを向いた。

「そんな話はどうでもいいだろ。もうやめだ、やめ」

「あんたが歌った幻聴、あたしもどっかで聞いたことある気がするよね」

「へっ？」

思わずミサトの顔を凝視してしまう。それから慌ててそっぽを向き直した。

「そんなん、ナツメロかなんかだろ。うつせえな」

「ナツメロとか最近の曲じゃないことは確かなの」

「ミサトが知らないだけなんだろ」

「…ほお」

ゆらり。

ミサトが陽炎のように立ち上がる。

しまった！

おれは自分の痛恨のミスに今更ながら気付き青ざめた。

「それは持ち歌二千曲を誇るカラオケ女王のこのあたしに対する挑戦と受け取ったわよ！」

「いや、違っ。ウソウソ！ 俺の失言だったっ！！」

高らかと宣言されたその言葉にぶんぶんと超高速で手を振り慌てて言いつくろっ。

「ならいいのよ」

と傲慢に言い放ち、ミサトはすんと再び席についた。よきに計らえとでも言い出しそうな様子だ。お前はいつたいどこの女王様だ

よ。あつ、カラオケ女王か…。

ともかくその偉そうな物言いにかなり腹が立つが、いつぞやのよう
にカラオケボックスに拉致されその二千曲ものレパートリーを永
遠と聞かせられたらたまったものではない。

あれは今思い出しても鳥肌モノ。もはやトラウマと言ってもいい。
おかげで俺は、あれきり女の子と二人きりでカラオケボックスに
入ることが出来なくなっただ。

俺の青春を返せ、こんちくしょうつ。

「じゃあいつたい何の曲だよ？」

「それがわかったら苦労はしないわよ。シンヤこそ聞き覚えないわ
け？」

首を振る。

悪いが俺はロック専門だ。

「でもホント、いつたいどこで聞いたのかしらねえ」

結局ミサトが思い出したのは、一週間の時間がたってからだった。

「で、何だつて？」

俺はカウンターのの中から呆れた顔でミサトを見上げた。

歌の話をしてからまる一週間。

ついに歌の出元を思い出したらしくわざわざおれのいる図書館まで報告にきたらしい。何とまあ暇人である。

おれの方はミサトに話した事すらすっかり忘れていたと言つのに、物覚えのよろしいことだ。

たぶん他に考えることがなかったのだろう。

ちなみに俺はこれでも図書委員である。

自分でも似合わないとは分かっているのに笑いたければ笑つてくれ。恨むべきは俺のジャンケンの弱さである。ちなみにミサトは大爆笑してくれた。

うるせえ、お前の保健委員の方がよっぽど似合わねえよ。そう言つた俺がぼこぼこにされたのはそれこそ言つまでもない。

「誰があの歌を歌つてたか思い出したのよ」

「だからそれは分かつたてば。いったい誰の歌だつて？　今はやりのイブニング息子つてやつらか？」

「…それ、本気で言ってるの？」

ミサトが凍傷を起こしそうなくらい冷たい目を向けてくる。

どうやら俺のジョークはフィギュアスケートより見事に滑つたらしい。

ちくしょう。慣れないことなどするもんじゃねえ。

「思い出したのは歌手の名前じゃなくて、誰の口から聞いたかなのよ。実はね…」

ミサトはきよろきよろとあたりを見回すと、こっそり俺に耳打ちした。

「あの、オオツカ リヨウジ なの」

「へえっ」

「シー——ッ！」

ついつい大きな声を出したオレをミサトは慌てて諫める。しかしそれは図書館だからではない。

なるほど。確かにその名前は意外だった。

二年のオオツカといえば俺でも知っている、いや、校内では知らぬ者はいない超有名人だ。

「でね、あたしひとつお願いがあるんだけど」

おずおずといった雰囲気でミサトが俺に頼む。

滅多にない殊勝な態度にいつもこんなだったら嫁の貰い手に困らないだろうに考える。

「あたしどうしてもあの歌のことが気になるの。だからオオツカに歌のことを聞こうと思うんだけど、シンヤお願いだからついて来てくれない？」

「何でさ。ひとりで行けばいいじゃん」

「だって相手はあのオオツカなのよ——！」

ミサトははっとして自分の口を抑えたが、叫んだ後で口をふさいでも意味はない。

周囲を見回しほっと息をついた。

俺としては別にそこまで神経質になることはないと思うのだが。

オオツカリヨウジはのほほんとした気風のこの学校において、唯

一にして最悪の不良として名を馳せている生徒だ。

大学生並みの大柄な体格と狂犬のような目付きの悪さで、どこぞの学校の番格と喧嘩して勝ったあの、中学の時人を殺して鑑別所に入れられたあの生徒どころか教師からも恐れられている。

しかしながら本当に噂の多い学校だよな。

「別に平気だろ。そんなにびくつかなくてもさ」

噂なんてだいたい無責任に大きくなっていくものだ。せいぜい話半分だろう。

特にこの学校なら四分の一ぐらいに割り引いてもいいかもしれない。

「そこまで言うくらいならついてきてっば！」

半泣きのミサトに俺はやれやれとため息をついた。そんなに怖いのならやめればいいのに。

「別に構わないけどさ、おれ今日当番で…」

「シンヤくん」

ぞわりと背筋に鳥肌が走る。背後から禍禍しい気配を感じた。

「知ってる？ 図書室って私語厳禁なのよ」

猫なで声があまりにも怖すぎる。

死すら覚悟して恐る恐る振り返ると、司書の先生がまるで般若のような素敵な笑顔でにっこりと微笑んでいた。

3、賢治好きに悪い奴はいない…かも？

「でも良かったね。当番外してもらって」

「よかねえよ…」

次の委員会のことを考えると泣きそうになる。俺はたださえ遅刻のため当番を増やされてしまっていると言うのに。

これ以上当番回数が増加すると俺は図書室の主にでもなってしまうそうさ。

しかし真の支配者はあの司書の先生であることには違いない。

図書館を追い出されてしまった俺は仕方無しにオオツカリヨウジを探して校内を歩いていた。

遠くから吹奏楽部が楽器をぶかぶか鳴らす音が聞こえるだけで、放課後の学校はひっそりと、まるで火の消えたような静けさだった。

「つつかさ、オオツカもう帰っちゃったんじゃないのか？」

噂は置いとくとしてもどうも部活に励むタイプとは思えない。

むしろ奴は帰宅部だろう。もちろん家に帰って大人しく定期試験に備えて勉強してるとも思わないが。

「馬鹿にしないでよ。そこら辺はちゃんと確かめてあるに決まっているでしょうが。外靴があるんだから校舎内にいるはずなのっ」

なるほど、そこらへんに手抜きはないわけだ。

「じゃあ、下駄箱でも待ってつかない」
「そうね、それがいいかも」

うちの学校はそれほど広くはないが、その分入り組んだ造りになっている。

下手に探し回ってもあつさり入れ違うのがおちというものだろう。ならば必ずやつてくる場所で待っているのが一番効率がいい。

だが階段へ向かった俺たちは、しかしどんな偶然が作用したのか。そこではつたりと目的の人物に出会ってしまったのだった。

あまりの巡り合わせの良さに思わず立ち尽くしてしまった俺たちを見て、オオツカは訝しげに眉を上げた。

「図書委員か…」

「…うつす」

片手を挙げて挨拶する。

「ねえ、もしかして知り合いなの？」

顔を引きたせそそくさと俺の背後に隠れたミサトがつんつんと俺のわき腹をつつく。俺はねじりドーナツツのように身体をひねった。

く、くすぐりたいぞつ、こんちくしょう。

「——し、知り合いと言うほどでもない」

なんとか魔手から逃れ一息つく。

そんな怪しげな俺たちの攻防を気にもかけず、無表情にオオツカは首をかしげた。

「図書委員、もしかして今日は図書室は閉まっているのか？」

「うんにゃ、単に俺が追い出されただけ」

実はオオツカは図書室の常連なのだ。

そうすると必然的に図書委員で当番の回数の多い俺は顔見知りになると言う寸法である。

別に本を読むから不良じゃないと言うつもりは俺にはさらさらないが、奴の借りていく本の傾向を知っている人間としては一概に悪い奴とは思えない。

宮沢賢治や夏目漱石を好んで読む人間が根っからの悪人ということはないだろう。

「そうか」

無愛想にそれだけ言って、オオツカは俺たちを追い越していく。

「あ、待った」

図書委員としての義務を全うして満足していた俺は慌てて声をかける。当初の目的をすっかり忘れていた。

「ちょっとあんたに聞きたいことがあったんだ。実は…」

ふとミサトをうかがったが、ミサトはがちがちに緊張していてどうにもモノを尋ねられる状態ではない。

お前が聞きたいって言ったんじゃないのか？

女ってわからんなあ、と思いつつも仕方無しに代りに訊ねてやることにした。もちろんこの貸しはノートで返してもらうつもりである。

オオツ力は怒りもせずキレもせず全くの自然体で俺の言葉を待っていた。

「あのさあ、この歌…」

俺は短いメロディーを口にした。やはり恥ずかしいのだが、こうなればやけた。

毒を食らわば皿まで残さず！

「あんた知ってるんだろう？ この歌のこと、ちょっと教えて欲しいんだけど——」

しかしその歌を聴いたとたん、今まで無表情に近かったオオツ力の顔色が見る見る変わった。

「知らんっ」

「知らんってあんた…」

それはどう見ても知らないと言う顔ではない。

だが足音も荒く、オオツ力はこの場を離れようとする。

「えっ、ちょっと待てよ」

「ついてくるなっ」

窓ガラスを震わすような怒声に俺は思わず首をすくませる。その隙にもどんどん距離が開いていく。反射的に追いかけようとした俺は、今度は後ろからシャツを引っ張られ尻餅をついた。

「何すんだよ、ミサト」

完全にオオツカを見失ってしまったではないか。

「もう、いいから」

振り返るとミサトがぶんぶんと頭を振っていた。ふわふわのツインテールがデندنデン太鼓のようにくるくる揺れる。

今にも泣き出しそうなその顔に俺は思わず怯んだ。

「ちょっと気になったただけなの。だからもう無理なくていいから」

「でも…」

「いいからっ」

そう言い放ち、顔を覆ってしゃがみこんでしまった。

やれやれ。

ミサトから言い出したことだ。無理強いすることも出来ず、俺もため息をついてその場で足を伸ばす。フローリングの床の冷たさが尻に染みいる蝉の声。

オオツカにしても、まさかあそこまで怒りっぽい奴だとは思っていなかった。

何があんなに気に食わなかったのかは知らないが、やはり「我輩は猫である」や「銀河鉄道の夜」では人間性は測れないようだ。

それとも一緒に芥川竜之介の「羅生門」や太宰治の「人間失格」

を借りていたことも考慮に入れるべきだったか。

「そうか…、オオツカも自分が歌っているところを聞かれたのがそこまで恥ずかしかったんだな」

うんうんとうなずく。

それは後から見当違いも甚だしかったということが分かるのだが、そのときの俺は本気でそう思っていたりした。

俺はやれやれと息を吐くと床に手をつき立ち上がる。

否、立ち上がるうとしていたのだ。

俺は片膝を床につけたままの体勢で、じつと耳を澄ます。

「シンヤ？」
「しっ」

俺は全身の神経と言う神経を耳に集中させる。
かすかに耳にメロディが届く。

「歌だ」

「えっ？」

「あの歌がまた聞こえる」

俺は今度こそ立ち上がると、歌の出元を探して廊下を走り出した。

「待って、シンヤ」

もうやめようよ、と言う悲愴なミサトの声がしたが、俺は聞こえない振りをした。

誰にも聞こえなかったあの歌。

俺だって、気にならない訳じゃなかったのだ。

4、デメちゃん（黒出目金・^め）は大切に！？

その扉の前に立ったとたん、唐突に歌声は止んだ。

屋上へと続く鉄の扉。

後ろからぜいぜいとミサトの苦しげな呼吸が聞こえる。

「ミサトよお」

俺は呆れながら振り返る。

「怖かったら別に着いて来なくていいんだぜ？」

「別に怖くなんかないわよっ」

真っ赤な顔でにらみつてくる。こうなったらミサトはここでも動かない。クレーン車でもぎりぎり無理。

俺は諦めてノブに手をかけた。

鍵は掛かっていない。

思い切って扉を押すと、錆付いた蝶つがいは軋みながらゆっくりと開いた。

見晴らしのいい景色が視界いっぱいに広がる。

「おお、パノラマ」

強い風が髪をなぶる。

風圧に細めた目で辺りを見回したとたん、おれは今一番遭ってはならない人物と目が合ってしまった。

「よ、よおっ」

引きつりながらも陽気に手を挙げて挨拶してみる。

「図書委員……」

低く獣のように唸りながらオオツカは俺のところへずんずん向かってきた。

「貴様、着いて来るなど言っただろうがっ」

「誤解だ、誤解っ」

屋上は四階だが。

襟元を掴み上げられ、俺は必死になって奴の腕をぺちぺち叩く。
俺はまあ平均的な身長ではあるのだが、やつの体軀が半端じゃない。俺の足は完全に宙に浮いてしまっていた。

「歌が、歌が聞こえたんだっ」

「歌？」

俺が息も絶え絶えそう言ったとたん、オオツカが眉をひそめた。

「やめてっ。殴らないで！」

その隙にミサトがオオツカの腕に飛びついた。

「シンヤを殴らないで、シンヤは何も悪くないの！」

自分の太ももくらいの太さがあるのではないかと思われる腕にすがり付いて、ミサトは泣きそうな顔でオオツカを見上げている。

オオツ力はまるで水槽から飛び出した金魚（黒出目金・♂）のようになっている俺とミサトを交互に見た。

「いや、別に殴りはしない」

すとん。

オオツ力はあっさり俺から手を離した。

「すまなかつたな」

「ひつく!？」

その場に尻餅をついて咳き込む俺は、無愛想ながらも謝罪の言葉をかけられて思わずしゃっくりのような声を上げてしまった。オオツ力はバツが悪そうに横を向いている。

「勝手についてきたのなら話は別だが、お前も呼ばれたのなら構いはしない」

「呼ばれた？」

「こつちだ」

すたすたとオオツ力が歩き出す。

俺もなんとか立ち上がり続いて歩き出す。後ろからミサトもちよこちよこと付いてきた。

しかしミサト、だからお前はオオツ力が怖かったんじゃないのか？

女は分からんと再び思っていると、オオツ力は屋上の一角にある物置になっている小部屋の前で足を止めた。

てつきり中に入るのかと思えば、オオツカは扉の前を通り過ぎその側面に回る。

校舎が古いせいか、コンクリートの壁にははつきりと亀裂が走っていた。

というか、この学校地震が起きればあっさり倒壊するんじゃないだろうな。慣れ親しんだ学び舎に俺は急速に不安を覚える。

「聞いてみる」

「はあ」

いきなりその亀裂を指差され、訳が分からないままひび割れに耳を澄ます。すると、

「うええっ!？」

俺は思わず奇声を発しオオツカの顔を見てしまった。

「えっ、なんなのよ」

ミサトが俺を押しつけて同じように耳を澄ます。

「あっ、歌が聞こえるっ。シンヤ、これがあんたの言っていた歌なの?」

そこからかすかに聞こえてくるのは授業中、そして先ほど廊下で耳にしたあの歌声だ。どうやら授業中と違ってこの歌声は誰にでも聞こえるようである。おれはオオツカに尋ねた。

「なあ、この歌はいつたい何なんだ？」

「さあな。俺にも分からん」

オオツ力はあっさりと俺の疑問をスルーしやがった。

「だが、この歌はいつもいつも聞こえるわけじゃない。授業中聞こえることもあれば放課後に聞こえることもある。夜中…、は調べたことはないが早朝に聞こえることもある。聞こえる場所も声の大きさもまちまちだ」

オオツ力はちょっとびっくりするぐらい詳しかった。

これほどまでにすらすら述べられるということは、どうもあちこちを聞いて探していたようである。

ここまでくるとなると、奴が謎の歌フリークである可能性はかなり高い。あるいは歌マニア。つか授業はどうしてんだよとおれは声を大にして聞きたかったりなかったり。

「この亀裂からは、他の場所よりもずっとよく聞こえるんだ」

オオツ力はさらにマニアっぷりを発揮しつつ、稲妻型の壁の亀裂をそつと指先でなぞっていく。もしも塗り壁に学校があるなら、この壁は汽車に乗って魔法学校に行くのだろうか。

「去年の秋ごろだったか。俺もお前と同じように歌声に導かれてここにたどり着いた。あの頃は俺が最も荒れていた時期だったが、この歌声を聞くと不思議と気分が落ち着いていた」

この歌を聞き続けたおかげで今ではこんなに性格が丸くなったしな。

無愛想なこのセリフはどうやら奴なりの冗句のようだが、先ほど締められかけたばかりの俺としては笑うに笑えない。笑うべきか流すべきか、それが問題だ。

「でもどうしてあそこまでして歌のこと隠そうとしていたんだよ」

もしやオオツ力はこの不思議な歌を独り占めにしたいとでも思っていたのだろうか。

だがその所為でおれはもう少しのところで、昇天してデメちゃん（黒出目金・♂）に生まれ変わるところだった。

次から祭りで金魚釣りを見ても金魚を苛めるのはやめにと心に誓う。紙が破れてもしつこく金魚を追ひ回したりするのもNGだ。

オオツ力は妙にふてくされた顔で鼻を鳴らした。

「だから悪かったと言っているだろうが。この歌は価値の分からん有象無象に聞かせるのにはふさわしくないと思ったもんでな」

「そんなもんかねえ」

呆れるようにぼやいて見せたが、しかし実は俺もその気持ちは分からないでもなかった。

確かにこの不思議な歌声に物見高い野次馬やマスコミ関係者なんかが群がるのはあまりにも似合わない。そのとき俺はようやくオオツ力のこの表情が照れから来るものなんだと気付いた。

「でもこの歌、何でこんな所から聞こえるんだろう」

壁の中から聞こえる歌声にうつとりと耳を澄ましているミサトがそう呟いた時、ちようつがいの軋む耳障りな音が屋上に響いた。はっとして目を向ける俺たちの前で、三階の階段から続く扉がゆっくりと開いていく。

「お前たち、こんなところで何をしているんだ」

そこから出てきたのは胡散臭い科学の教師・篠崎だった。とはいっても別に怪しい科学を教えているわけではない。もちろん今流行の錬金術とかも教えてない。

しかし眼鏡のレンズがきらりと光を反射しているあたり、これ以上もなく怪しかった。

「ええっ、篠崎センセイ！？　なんでここにっ」

ミサトが例の甲高い声を上げて篠崎のほうに駆け寄っていく。足もとが妙に弾んでいるのは俺の気のせいかな…？

ともかく俺とオオツカはほとんど反射的に壁の亀裂を隠すようにその場に立ちふさがった。元から相談していた訳ではない。ただ、この時のおれたちはまるで双子のエスパーのように気持ちが通じ合っていたのだ。

例え叱られようが何しようがこの歌のことは隠さなければ。

篠崎はそんな俺とオオツカを眼鏡の奥の冷たい目でじっと見ている。

そしてその視線は不意に後ろの壁に向けられた。

（やべえ、気付かれたか！？）

俺たちはぎくりとするが、篠崎は薄い唇にふつと笑みを浮かべた。
ポーカーフェイス篠崎（リングネーム）の珍しい笑顔に思わずきよんとする。

だが次の瞬間、俺たちはとんでもないことを耳にした。

「お前たちも気付いたのか。その夢見鳥の唄に」

おれの目は皿になった。

5、美人のミイラの添い寝を希望

篠崎はこちらに向かって悠然と歩いてくる。その後ろからちよこまかと付いてくるのがミサトだ。…つかオメエはどっちの味方なんだよっ。

「篠崎。てめえ、何で…」

「大塚君。先生と呼びなさい」

信じられないという顔でつぶやくオオツカに篠崎は授業中とまったく変わらない調子で注意する。

篠崎は俺らが入学する前からこの学校で教師をやっている。ならば俺たちよりもこの学校に詳しくて当然かもしれないが、だからといってそう簡単に納得できるものでもない。

「せんせ、なんであんたがこの歌を知っているんだ」

俺も疑問をぶつけた。

しかも奴はだいたい詳しくそうだ。ならば篠崎はこの歌について何か知っているのかもしれない。単にオオツカに負けず劣らずの謎の歌フリークであるだけかもしれないが…。

オオツカは先ほどからずっと険しい眼差しで篠崎をにがんをつけている。その危険極まりない眼光はいざとなれば教師だろうが何だろうが関係ないと言っているようでもあった。

すごく頼もしい反面、ごく平均的な人生を歩んできたおれはちょっとときどきだ。

お願いだから刃傷沙汰だけは勘弁してくれっ！

だがそんな視線を受けてもなお、篠崎はやっぱクールだった。

「私とその歌を知っている理由？ それはね、私とその歌声の主を知っているからだ」

俺たちはそろって息を呑む。

予想以上に俺の推測は当たっていた。

篠崎は眩しさをこらえるようにずっと目を細める。

「声の持ち主は『キノシタ チョウコ』。君たちの先輩に当たるこの学校のかつての在校生だ」

かつての在校生。その奇妙な言い回しに、俺は思わずどきっとした。

「当時合唱部に所属していた彼女はそのホープだった。豊かな才能の持ち主でな、演奏会でもよくソリストを務めていた。やさしくて明るくて面倒見が良いので、下級生からも同級生からも好かれていた。私もそんな彼女に憧れていたな」

「そ、それでまさか壁に埋めたとか…」

篠崎の噂のひとつ、付き合っていた女子学生を殺して壁に埋めたという話がいきなり現実味を帯びてくる。こ、これはまさか大穴が来るのかっ!?

「埋める…？ 何のことだ」

からからに干からびた女子学生の死体が壁の中で歌っているとこ

ろまで想像して俺は青ざめたが、篠崎は不思議そうに首をかしげた。

「あの人は私よりひとつ上の学年だったが、だいぶ親しくしさせてもらっていた。そう、彼女は本当に良い先輩だったよ」

ええーっ、とミサトが素っ頓狂な声を立てた。

「篠崎先生ってこの学校の卒業生だったんですか？」
「もう二十年近く前のことだけれどもな」

篠崎はかすかに苦笑したようだった。
おれもこっそりと胸を撫ぜ下ろす。

どうやら篠崎がその女子学生を埋めたということとはなさそうだ。
当時一介の男子学生だったのなら、とてもではないがそんな手間ひまのかかる作業ができるはずがない。

まあ、一介の教師にだってできることとは思えないが。

しかもよくよく考えればだいぶ失礼な話だ。そんなこと口走った奴に考えなくても分かれと言ってやりたい。俺のことだが。

「彼女は明るくて勝気な生徒だったが、卒業が近くなるにつれてだんだんふさぎ込むようになっていった。卒業したくない。ずっとここで歌っていたいというのが口癖になっていた」

篠崎は壁にそつと手を触れる。

その仕草は偶然にも、先ほどのオオツカとまったく同じだった。

「結局、彼女が卒業することはなかった。卒業を間近にして彼女は亡くなったんだ」

「まさかつ、殺されて壁に埋められたんですかつ」

ミサトが再び叫んだ。どうも俺たちは似たような思考回路をしているようである。類は友を呼ぶというか朱に交われば赤くなるというか。だとしたらむしろ感染源はあいつの方。

「いや、交通事故だった。死体もきちんと茶毘に付された。しかしさつきから埋められた埋められたって何の話だ？ 学校でそんな噂でもはやっているのか？」

篠崎は不思議そうな顔をする。

まさか噂の中心はあなたですとも言えず、俺たちは顔を見合わせで適当にお茶を濁した。

「それで、いったいどうしてこの歌が聞こえるようになったんですか」

まさかその少女の幽霊が歌っているのか、それとも何か仕掛けがあるのか。

ついにその謎が明らかになろうとしている…！

「さあ、それは私にも分からないな」

だが篠崎もまた、あっさりと回答を放棄した。

俺はがたがたと膝から崩れ落ちる。

肩透かしというか、ここまで意味深に登場しておいてそれはないだろう！

「センセー、この歌について知ってるんじゃないかなかったんかよお」

「私が知っているのは単にこの歌声が誰のものかということだけだ。だいたいこんな超常現象の仕組みについて説明できるようなら、とつくに論文の一本や二本書き上げてノーベル科学賞を授与しているはずだとは思わないか」

篠崎はしれつとした顔でうそぶく。

うちの学校の科学教師はこれで結構野心家らしい。クールドライな篠崎でこれなら、体育の熱血教師・安藤 勇雄なんかは普通に世界征服でも企んでいておかしくない。

ちなみに歴史のナベやんはエジプトで美人のミイラに添い寝してもらったのが夢だと言っていた。これもかなり不健全な発想。

「だが幽霊が歌っているとまでは言わないが、この歌声にはやはり彼女の想いが何らかの形で関係しているのではないのかな。彼女は歌うことが本当に好きで、そして学校を愛していたからね」

「この学校に何か心残りが有ると…？」

「さてな。だが彼女の性格からして恨みだとか執念だとかそんな暗い感情を残しているとは考えがたい。彼女はだいぶさばした、どちらかと言うと竹を割ったような性格をしていたからな。思いを残していたとしてもせいぜい学校が好きだとか楽しかったぐらいのものではないだろう。もちろん、結局のところ私にも真実がどうなのか、この原因が何なのかはさっぱり分かりやしないのだがな」

困っているような疲れているような、溜め息混じりのそんな声。

遙か遠くを窺っているかのようにどこか昔を懐かしむ色を瞳に浮かべていた篠崎は、しかし瞬きひとつでそんな様子を一気に払拭すると、いつもと変わらぬ淡々とした声音で俺たちに告げた。

「もし君たちが彼女について知りたいなら図書室にでも行くといい。あそこには歴代の卒業アルバムが保管してあって彼女の代のものもあるはずだ。一応、彼女の写真も載っているはずだろうからな」

「…分かりました。よし、いくぞっ」

名残惜しそうなミサトを無理やり引つ張って、俺は屋上を後にする。

一瞬だけ振り返ると、篠崎はその場にただぼんやりと立ち尽していた。

俺には篠崎の奇行の理由が、少しだけ分かったような気がした。

耳障りな金属音がして扉が閉まる。

子供たちがいなくなつて一気に静まり返った屋上では、まだ甘く優しい歌声が流れている。

篠崎はひびの入った壁際まで歩み寄ると、その壁に背をつけそのままずると座り込んだ。

「チヨウコ先輩。あなたはいつまでこんなところで歌っているつもりなんですか？」

呆れたように空を見上げる篠崎の顔にどこか面白がるような色が浮かんでいる。

本人も気付かず、見ている者はどこにもいなかったが。

その笑みは、かつてこの学校に通っていた頃のそれとなんら変わらぬものだった。

6、さらば、我らの青春の日々よ（完結）

司書の先生に見つからないようにこっそりと図書室に忍び込み、おれたちは二十年近く前の卒業をアルバムをひっくり返していた。みつしょんいんぽうしぶる！！あるいはスパイ大作戦。

結構本気で緊張するおれは額の脂汗をぐいと拭った。

「あつたぞつ。＜キノシタチヨウコ＞だ」

「えっどれどれ」

オオツカの無骨な手が指差す先をおれは覗き込む。

そこには元氣よく笑っている一人の少女が写っていた。

わずかに色褪せた写真の下には小さく《木下 蝶子》と書かれている。

「これが、あの歌をうたっていた人か…」

「歌っている人だろ」

そうだ。

この人はまだ、この学校で歌い続けているのだ。

おれはまじまじと写真を見る。

「でも、なんだか普通の人だなあ」

写真の少女はどこにでもいるようなごく当たり前の少女だった。顔かたちの造作で言ったらミサトの方が若干整っていると言えるほど。

「たぶん、普通の生徒だったんだろうよ」

オオツカはポツリとつぶやいた。

授業中に居眠りをして焦ったり、学校が好きで好きで卒業したくないと考えたり。

きっと自分と変わらない普通の生徒だったんだろう。

俺は短く思いを馳せ、パタンと表紙を閉じた。卒業生のアルバムなんてめったに見る生徒はいないらしく、歴代の卒アル（略）は色褪せてはいるものの破けてたりはしていない。

つつか…、

「ミサトっ！ てめ、ひとり静かだと思ったら何見てんだよっっ」

「いやゝんっ、篠崎センセイてば若い。かわいゝいっ」

「なにがいやゝんだっ、こらっ」

ミサトは《キノシタ チョウコ》より一学年あとのアルバムを広げてうつとりと頬を染めている。

そこには今とあまり変わらない顔の篠崎（若）がすました表情で写っていた。

「ってか篠崎、ぜんぜん顔変わってないし…」

怪奇。万年童顔科学教師。それとも当時が老け顔だったということなのか？

「ねえねえシンヤっ、この部分切り取ってもって帰っちゃ駄目かな？」

「あほかっ！ お天道様は許しても図書委員は許しませんよっ」

「男の嫉妬は見苦しいな」

「オオツカああっ！ 頼むからそんな恐ろしい誤解はしないでくれええ！」

半分泣きそうになりながらオオツカにすがりついたおれは、次の瞬間背後に恐ろしい殺気を感じ動きを止めた。

不思議そうに顔を上げたオオツカの表情が凍りつく。

つか、学校中から恐れられているオオツカにこんな顔をさせるなんてマジでただ者じゃな――、

「シンヤ君。あなたも、大概懲りないわねえ」

妙に優しい司書の先生の声を聞きながら、おれの意識は山の彼方の空遠くへすうつと薄れていった。

ああ。

さらば、おれの青春の日々よ…。

肩を落とし、よろよると幽鬼のように歩くおれの肩を、ミサトが遠慮なしにばしばし叩いている。

「はは、ドンマイドンマイ。きっとこんな日もあるわ。これも運命だと思って――、」

「諦められるかっつ」

半泣きどころか本気で涙さえ滲ませ、おれはミサトを怒鳴りつけ

る。つつかお前がすべての元凶だろうがっ。

あの後おれにどれほど恐ろしい災いが降りかかったかはあえて言うまい。

ただ先ほどからずっと哀れみの色を浮かべているオオツカの眼差しがやけに胸に沁みた。ありがとう。おれの味方はあんただけだ。首絞められたけど。

「しかし、結局何も説明できずじまいだったわね」

ミサトがはあと息を吐く。

分かったのはせいぜい歌っている人の名前とその人が教師・篠崎の先輩だったということだけ。

どうしてこの歌が聞こえるのか。なぜ聞こえる人間と聞こえない人間がいるのか。分からないことはまだまだたくさんある。むしろ分からない事だらけだと言っていいだろう。しかし――、

「まあ、いいんじゃないか」

おれもまた、その疑問を放棄することにした。

どうせすべての謎を解明したとしても歌が聞こえることには変わらない。

だったらひとつぐらい不思議なことがあってもいいんじゃないか。

人生、謎と休みは多い方がいい。

「あつ、でも歌を聞いても眠くならない方法だけは何とか知っておきたかったなあ」

うゝむ、と真剣な面持ちでおれは腕を組んだ。

じゃないと、今学期のテストが本気で洒落にならないことになる。

「眠くなる？　なんだそれは」

オオツカが不思議そうに首を傾けた。ミサトがいそいそと説明をする。

「シンヤはね、あの歌を聞くと眠くなるんだって」

「そうなのか？　おれは別に授業中に聞こえてきても眠ったりはしないが」

なに！？

何だと！！？

オオツカは普通に授業に出ているのか！？

つつか、ミサトお前はオオツカが怖いんじゃないのか！？

…いや、別にそれはもうどうでもいいことなんだけど。

「じゃあ眠くなるのって歌が原因じゃなくてシンヤがたんにだらしないだけなんじゃないの？」

「うぎゃっ」

おれは言葉の弾丸に撃墜される。

「うまいことにはうまいが、歌自体は普通のもんだしな」

「ぐはっっ」

さらにオオツカまでからも駄目出しを受けておれは床に崩れ墜ち

た。

こ、言葉の暴力反対。
むしろおれが駄目駄目なのか？

「まあまあ、シンヤ。いいじゃないもしまた寝ちゃったら、あたしがノートを貸してあげるわよ」
「本当かつ」

おれはぱつと顔を上げる。
につこりと微笑むミサトが天使に見えてきた。

「うん。一冊1万円で」

再び床に沈む。

なんてこつたい。天使には悪魔の尻尾が付いていた。

床に涙で「の」の字を刻むおれの肩をオオツカはぽんぽんと叩いた。

「良かったな。面倒見のよい彼女がいて」
「だからその恐ろしい勘違いだけはやめてくれえええっ」

廊下におれの悲鳴が長々と響き渡った。

賑やかな校舎にひっそりと歌が流れている。

それは夢に出てきた懐かしい景色に

誰かがそつと口元をほころばせているようでもある。

楽しげに、幸せそうに。

甘く優しい歌声は、いつまでも変わらぬその日常を祝福している。

その記憶が何ものにも変えがたい宝物になるように。

歌が聞こえる。

誰も知らない優しい歌声。

歌が聞こえる。

その歌の名は <夢見鳥の唄>。

【END】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0228b/>

夢見鳥の唄

2010年10月12日03時26分発行